57　継子の味噌弁当

字伊原　玉城ハル

自分の子とね、継子はどうしても本妻の子だったでしょう。自分の子なら後妻だから。それでもう、区別してね。御飯上げる時も区別して、しておったって。昔はそんなにご馳走もないし。もう、味噌といっても味噌はもう自分で作るから、いっぱいあるから。

自分の子どもにはいつもおいしい物を上げてね、何か。そしてこの、継子にはね、味噌ばっかり食わせておったってよ。味噌ばっかし。

そしたら、自分の子はね、自分の子どもはもう、おいしい物だといっても、昔だからそんなになかっただろうが、自分の子はおいしい物を上げたつもりであるけれども、栄養はつかない。継子はね、味噌ばっかし朝晩食べているから、もう体が丈夫になってよ、味噌の栄養で。それ、強力（ごうりき）になったね。継子はあの、優れたって。

類話
字東里　玉城　春（東辺名区）
字東里　下田ミツ（上里区）